Neopsylla sasai K.et J. Hystericopsylla gigas subsp. Catallagia sp. Peromycopsylla sp. の6種を示出した。
之等の中 Hystericopsylla は多く若 new subsp. と、又 最後2者に new sp. と考えられるが、今日の検査統行中である。凹葉重 undertaken 若しくは新種と考えられるものには、いったも月原(ツキサブ)に於て1952年10月採取せるものである。本研究は一部を文部省科学研究補助金によつたものである。
【札幌医大衛生】

毒殺によるハタネズミ個体群減少率の算定

田中 亮

Tanaka, R.: Field studies on the reduction of Microtus population subjected to poison baits

われわれは野鼠個体群の大きさの算定に記号法数指数 βを考慮すべきであることを知つた。つまり一般に 2>1 であつて、このことは記号個体の捕獲率 p が未記号個体のそれ p’ とは相等しくないためであり、日本産野鼠で
多くは >1 即ち p>p’ である。今迄にわかつた所ではスミネズミ、エゾヤチネズミは β>0.5 で区別されなが、ハタネズミは β=0.42 (95% 信頼限界 0.32~0.42) を示している。それで個体群の収集減少率を知るには、毒殺後個体数をこの idea にもとづいて算定して比較すれば最も確実だ 結果をうるわけであるが、この際一般に毒殺後において記号個体の一部も生残つているので、やや一定の β値が保持されていると考えてさくばねられない、そこで毒殺後個体数を計るため に特別の式が必要である。この方法を実地に適用してみる目的で、富士山草薙森林地(海拔800~1000 m)において、ハタネズミ個体群を対象として1952年10月に抜 野外作業を実施して次の結果を得た、毒殺後にラットウキヨコ症および、その実験的価値が種々の点で優れているのがわかった。鼠による捕獲数が少なくなつたので、毒殺後個体数の数理的算定は不適当であったが、毒殺消失増減および生物的根絶から毒殺数の合理的限界 を推算し、これを算定された毒殺前個体数と比較して個 体群減少率を算出したがその有意差を認めなかった。 個体群の大部分は死活したようであるが、ある少数は生存したことは確実である。このような強力毒鼠(赤色)に対する個 体群の異物反応は鼠に対するそれよりも明かに小さいと ことが認められた。従つて対鼠異物反応が他種に比して劣 い本種では、毒殺後個体数の算定に鼠によるよりも毒 剤消失資料に基づいてむす方が有効のように思われる。